連載67 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（65歳・内科）

独居の患者さんの真夏の天国への旅立ちは悲惨な光景でした。

ある日の午後でした。在宅患者Y.Hさん（団塊の世代・男性）の娘さんから緊急の電話がありました。とても取り乱した様子で「父がすでに息を引き取っている」と言うのです。

急ぎ、ご自宅へ行ってみると、日ごろのY.Hさんの面影はなく、全身浅黒くむくんでいました。しかも、一部は炭火に焼かれたような様相で、少なくとも死後3日は経っていたようでした。看護師2人と清拭（せいしき）しようとしたのですが、皮膚細胞が溶解していて、うまくできないのです。季節が夏場であり、窓やドアを閉め切っていたため、室内が高温になったせいでしょう、とても悲惨な状態となりました。

思い起こすと、初診は平成22年ころで、病状は、吐血、下血、メニエール症状でした。高度機能病院の精査で、胃・十二指腸潰瘍、バセドウ氏病、アルコール性肝障害、脊柱管狭窄症の診断を受けましたが、何があっても入院治療は希望せず、在宅での療養で人生を終えたく、全てを天命と受け止め、後悔はしないとのことでした。その後、在宅医療を通じて、4年間のお付き合いをさせていただきましたが、常に平常心で思慮深く、しっかりとした口調でお話しされる方で、俗っぽさがなく、全てにおいて多くを望まれませんでした。

このような凄絶な最期に向き合うと、あらためて人の命のはかなさに思いを寄せることとなり、いかに「後悔のない日々の生き方」が大切なのかを痛感したのでした。

そして、Y.Hさんにとっては、満足のいく人生であったのだろうと信じてやみません。

合掌

約20年間の、私の在宅医療経験から、書物からの知識ではなく、臨床実践での体感がいかに大切かということを、あらためて認識しました。

病気の気配や患者さん本人の生き方を感じとり「大局的に医師が裁量権を発揮しなければならない」現在まさにその時なのでしょう。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 19名
（常勤6名、非常勤13名）
内科・外科専門医 16名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設!

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する
臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/